

---

傷

g g

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

傷

### 【Nコード】

N2162M

### 【作者名】

ggg

### 【あらすじ】

あらすじ、傷だらけの男がイロイロやります

## 第一話（前書き）

えーと、gggです、いろいろ至らない面もありますが、ご了承ください。

あと、物凄く下手くそです

自分でも、よくこんな駄文書けたと逆に驚いています。

## 第一話

傷

ドサッ!!

竜司「落としましたよ?」

目の前にいた少女が落としたハンカチを拾い、渡そうとした

?「あ、ありがとう・・・」

きゃあああああああああ~~~~~!!!!!!!!!!!!

少女は、僕の顔を見るなり悲鳴を上げて逃げていった

竜司「・・・また、逃げられた・・・ハンカチ渡してないのに」

彼の名前は、戦神 竜司、身長180cm、体重65キロ、

体は、引き締まった無駄のない筋肉のつき方で、顔は厳つい  
さらに左目に奔るでかい傷がもともと怖い

顔をさらに際立たせていた、さらに顔だけでなく

体中傷だらけだ、しかしそんな風貌に反して竜司の

双眸は非常に優しい目つきで哀愁が漂っている

髪は銀色の長髪をヘアバンドで、上げている。

（ギルティギアのソルかネギ魔のラカンみたいな髪型）

時は、凄く未来、人類は地球外生命体との遭遇や

獣人や魔法の存在を知り、技術は大いに進歩していた

これは、そんな時代に生きた一人の男の物語

入学式が、終わり指定された、教室に入り席に着くと何もせず眠りについた

ここは、太陽系の地球にある、男女共学の

超マンモス校、麻帆良学園、僕はその高等学部に入學した一年生だ。

静香「おはよう、はい、皆座って〜」

元氣な挨拶とともに教室に入ってきたのは、担任の、坂江 静香

静香「え〜と、私がこのクラスの担任の、坂江 静香です皆よろしくね

・・・じゃ〜とりあえず自己紹介をして貰おうかな」

静香の言うことお聞き、皆が自己紹介を始める、そして僕の番が回ってきた

僕は意を決して立ち上がる、その瞬間賑やかだった教室がシーンと静まり返る

竜司「戦神 竜司です、よろしく願いします」

静香「・・・はい、じゃ～次の人」  
男「は、はい!!」

なるべく平静を装おうとする静香だが、顔が引きつっていた

静香「はい、次は・・・」

ヘリオン「はい!!、わ、私はへ、ヘリオン、B、ラスフォルトで・  
・・・!!」

あ、舌嚙んだ、その瞬間教室に居る全員が同じことを考える

竜司「ん？彼女は・・・」

僕は、気づいた朝会った少女だと

ヘリオン「痛～～～!!」

舌が痛むのか、口を押さえていた

・・・

・・・

一時間後

竜司「あの～」

ヘリオン「は、はい、なんで・・・しょう・・・か?」

此方を向いた瞬間、彼女の顔が恐怖のあまり、引きつっている

そして、今にも泣きそうな顔で僕に尋ねる

ヘリオン「あの、い、いったい何のようでしょうか？」

竜司「あ、あの、これ」

僕は、そう言つてハンカチを手渡す

ヘリオン「これは、探していたんです、有難う御座います」

竜司「い、いえ」

ヘリオン「すみません、今朝は、取り乱してしまつて」

竜司「大丈夫です、慣れてますから」

ヘリオン「もし良ければ、お友達になりませんか？」

僕は、わが耳を疑つた

竜司「・・・も、もう一度言つてくれませんか？」

ヘリオン「はい、ですから、私とお友達に、なつてくれませんか？」

竜司「ぼ、ぼぼ、僕なんかで良いんですか!？」

ヘリオン「はい!、勿論です!」

僕は、目頭が熱くなるのを覚えた

ヘリオン「如何したんですか？」

竜司「いや、今までそんな事言われたの、初めてだから、驚いて」

ヘリオン「それで、返事は」

竜司「不束者ですが、宜しくお願いします」

ヘリオン「こちらこそ宜しく願ひします、竜司さん!」

今日は入学式、まさかハンカチを拾って渡すだけで人生初の友達が出来るとは思ってもみなかった。本当に今日はいいい日だった。

（戦神 竜司の日記より抜粋）

次の日

ヘリオン「おはよう御座います、竜司さん！」

竜司「おはよう」

？「おはようヘリオン」

ヘリオン「あ、おはよう御座います、今日子さん！」

今日子「……ねえヘリオン……この人は……誰？」

今日子と呼ばれる針金頭のボーイッシュな少女は笑顔を引きつらせつつ

ヘリオンに尋ねる

ヘリオン「あ、こちらは戦神 竜司さんです」

竜司「どうも、竜司です」

今日子「よ、よろしく」

？「やめて下さい！！」

少女の大きな声が聞こえた

竜司「ん？」

今日子「あれは……」



僕は、声の方を見た。

そこでは二人の少女が、不良の集団に絡まれていた

？「放しなさいよ！」

？「やめて下さい」

すると、ヘリオンは、不良たちに近づくと

ヘリオン「その手を放して下さい！」

不良1「あゝ文句あるのか、この糞アマ！！」

強面の不良の威嚇で完全に氣勢を削がれたヘリオン

不良2「この子もなかなか可愛いじゃねえか」

不良3「へへへへへへへへ」

不良達がヘリオンに手を伸ばす

不良2「グハッ！！」

ドサッ！

不良2が地面に倒れる

ヘリオン「竜司さん？」

今日子「竜司・・・」

僕・・・俺は、気づいたら不良2のみぞおちに裏拳を叩き込んだ

不良1「何だデメエエ！！」

不良3「ヤンのかこらあああああゝゝゝ！！！！」

7人程の不良が俺に殴りかかる

不良5「おらあああゝゝゝ！！！」

しかし不良の攻撃は一撃も俺に当たらない

竜司「はあっ！」

ドンッ！！

まるで、自転車とぶつかったかのごとく、3人の不良を巻き込みながら、不良4が吹き飛ぶ

ガンッ！！、バコッ！！、ドカンッ！！

一分後

竜司「ん？」

気がついたら、不良達は一人残らず気絶していた

ああ、やってしまった

今日子「すごい」

ヘリオン「凄いですよ、竜司さん」

二人が、僕を褒めちぎっている

？「あ、あの〜」

ヘリオン「はい、何でしょうか？」

？「ねえ〜、お姉ちゃん、そんなのほつといて、行こうよ〜」

？「駄目でしょう、ニムあの人たちは、私たちを

助けてくれたのですから、ちゃんとお礼を言わないといけないですよ」

ニム「めんどくさい」

？「こら！、すみません、それと先ほどはありがとうございました」  
ヘリオン「いえ、いえ、お礼を言うなら、あちらに居る、竜司さんに言ってください」

？「はい、ありがとうございます、申し遅れましたが私の名は  
ファーレーン・B・ラスフォルトと申します」

ニム「ニムントール・G・ラスフォルト」

ヘリオン「ラスフォルト？・・・じゃあ、お二人もスピリットなんですか？」

ファーレーン「はい、と言う事は、貴女も・・・？」

ヘリオン「はい！、私はヘリオン・B・ラスフォルトです」

今日子「会話が弾んでいるとこ悪いけど、早く竜司の所に行ったら？」

ファーレーン「そうですね、では」

ファーレーン「あ、あの〜」

竜司「何でしょうか」

ファーレーン「先ほどは、助けていただいてありがとうございました」  
竜司「ああ、別に当然のことをしただけですから」

ファーレーン「でも、ちゃんとお礼させてください」

ニム「・・・」

ファーレーン「申し送れました、私の名前は、ファーレーン・B・

ラスフォルトです」

竜司「どうも」

ファーレーン「それでこっちが・・・ニム？」

ニム「・・・ニムントール・・・ねえ、お姉ちゃんこんなの、ほお  
つておいて

早く行こうよ」

ファーレーン「こ、こら！だめでしょうニム！こんななんて言っ  
たら

すみません、何時もはもつと、素直で良い子なんですが」

竜司「気にしてないですよ」

ヘリオン「竜司さん、早く行かないと遅刻しますよ」

竜司「やっべえ！、もうこんな時間だ！」

ファーレーン「いけない！遅刻しちゃう・・・すみません、この埋  
め合わせ

は後日するので」

竜司「その事は、大丈夫ですから、早く行きましょう」

ファーレーンさん、ニム」

ニム「竜司は、ニムって、言うなああああああああああ  
！！！！！！！！」

ドシッ！！

強烈な、ニムのローキックが竜司の向う脛、つまり

弁慶の泣き所、に炸裂した

竜司「！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

ファーレーン「すみません、竜司さん、こら！ニム駄目でしょう  
蹴ったりなんかしたら」

ニム「ふんっ！」

そう言って、ニムは、スタスタと行ってしまった

続く

## 第一話（後書き）

すいません、何かいろいろ、すいません  
あと、更新も物凄く遅いです、そこも踏まえて、すいません

## 第二話（前書き）

第二話投稿です、いろいろ出す予定ですが、全部出し切るのは何時になるかわかりません

## 第二話

傷

竜司「は、間に合った」

ヘリオン「はい何とか、間に合いました」

今日子「遅刻ぎりぎりよ」

ガラガラ

？「どうも、今日からこのクラスの担任になりました、ネギ・スプリングフィールドです  
よろしくお願いします」

教師だと入ってきたのは、静香先生ではなく、ネギと名乗る若干10歳の少年だった

竜司「これ、何のギャグ？」

・・・

・・・

・・・

その後の授業は滞りなく行われ、今は昼休み

竜司「いや、びっくりした」



ヘリオン「そうですね」

ファーレーン「あ、竜司さん」

竜司「あ、ファーレーンさんどうしたんですか？」

ファーレーン「いえ、お昼を食べようと思ひまして、竜司さんでもすか？」

竜司「はい、購買で買ったパンなんですけど」

ニム「お姉ちゃん、竜司なんかほつといて早く食べよう」

ファーレーン「ニムダメでしょう、竜司さんをそんな風に言ったらそれに目上の人を呼び捨てにしたら、だめでしょう」

竜司「いえ、気にしないで下さい、それに呼び捨てでも構いませんよ」

ファーレーン「でも」

ニム「お姉ちゃん早く食べようよ」

ファーレーン「はいはい」

そんな二人を見ながら、僕もパンを食べることにした

竜司「？」

ヘリオン「どうしたんですか？」

竜司「いや、あれネギ先生だよね」

ヘリオン「ほんとだ、ネギ先生ですね、でも何をしているのですでしょう」

肯定の端っこにいるネギ先生を見ていると

竜司「杖？」

ネギ先生は、杖にまたがって・・・飛んだ

竜司「!!!？」

ヘリオン「!？」

ネギ先生はだんだんこっちに近づいてくる

ネギ「あ、どうも確か君は竜司君でした」

竜司「はい、ネギ先生はもしかして・・・」

ネギ「はい、見ての通り、魔法使いです・・・まゝまだ見習いですがどね」

ファレーン「私魔法使いを見るのは初めてです」

一人だけ、落ち着いた様子でニムがたずねた

ニム「で、どうしたの空なんか飛んで」

ネギ「あ、忘れるところでした、実は今一人の女性とが暴れまわっている

と報告があつたのでこれから注意に行くところです」

竜司「じゃあ、僕も行ってみようかな

ヘリオン「じゃ、じゃあ私も」

ファレーン「面白そうですね、私も行きます」

ニム「お姉ちゃんが行くなら・・・」

と言う事で、学園の広場に行くことに

そこでは、燃えるような真っ赤な髪の少女と  
二十二人ほどの不良が争っていた

竜司「うわゝすごい」

ネギ「これは、一体どっちを止めれば良いのでしょうか」

不良は確かに二十二人ほどいた、しかし赤い髪の少女が

不良たちをボコボコにしていた

赤髪「ふん!!」

がつんっ!!

不良1「うあああああああゝ!!!!!!」

ニム「きゃっ!!」

ファーレーン「ニム!!」

赤髪の少女が不良を殴り飛ばした、その不良がニムの方へ向かってくる

ドカツ

竜司「大丈夫?」

間一髪で不良とニムの間に割って入ってニムへの直撃を避けた

先生「君、危ないからやめなさい」

赤髪「・・・」

赤髪の少女が注意した先生を睨むと、先生はすぐに立ち去って行った

竜司「どうしよう」

ヘリオン「さあ、竜司さん、あの争いを止めてきてください」

竜司「・・・え?」

ヘリオンは期待の眼差しで僕を見つめる



？「力の使い方が全然なっていないな」

竜司「お前は、誰なんだ？」

？「俺か？俺は龍二だ」

竜司「竜司は俺だ」

龍二「【竜司】じゃねえ【龍二】だ」

竜司「どうゆう事だ？」

龍二「つまり、お前は多重人格だ」

竜司「多重人格？」

龍二「そう、安心しろ基本人格はお前だ、お前にはほかにも幾つか人格がある、人格【竜司】は普通の性格、人格【龍二】の性格はクレイジー」

竜司「クレイジー」

龍二「安心しろ、狂っているわけじゃない、羽目を外している状態の事だ、それに狂っている性格は他にある・・・と、説明は後だ  
お前は一時的に下がってもらうぞ」

竜司「え？」

龍二「まさか、一日で二回もチェンジするとはな」  
不良「うおらあああああああ」

再び、時が動き出す、と同時に不良が眼前に迫る

龍「フンッ!」

ドゴッ!!

目の前に迫った、不良は俺の拳を顔面に浴びて、吹き飛んでしまった

龍「行くぜ、おらあああああああ!!!!!!!!!!!!!!!」

続く

### 第三話（前書き）

連続投稿です、今回は何時もより短めですではどうぞ

## 第三話

傷

龍二「ふう、やっと終わった」

ヘリオン「お疲れ様です」

龍二「お、ヘリオンどうだった」

ヘリオン「ふえ？」

龍二「俺のパンチ」

ヘリオン「え、ええ」と

ファレーン「切れがあつて凄かったですよ」

龍二「そうか」

などと、話していると

ネギ「龍二君」

龍二「なんすか？」

ネギ「貴方は、多重人格者ですね？」

龍二「その通り、俺は人格【竜司】の内のひとつ【龍二】だ」  
ヘリオン「え？」

俺は、一通りの事情を説明した

ネギ「竜司君と変われますか？」

龍二「ちよつと待ってくれ」



竜司「出番か・・・」

目が覚めると、目の前にはネギ先生がいた

ネギ「竜司君ですね？」

竜司「はい人格【竜司】です」

ネギ「しかし、本当に多重人格者がいるとはこの目で見えるまでは、信じられませんでした」

竜司「どうして気づいたのですか？」

ネギ「はい、【竜司】君から【龍二】君に変わった時微かにですが、気や魔力の気配が変わったんです」

赤髪「・・・」

赤髪の少女が立ち去ろうとした

ネギ「あ、ちょっと待ってください」

赤髪「何ですか、私は何もしていない、私は彼らが

戦いを挑んできたから、自分を守るために戦っただけです  
つまり、正当防衛です」

ファレーン「あれは、過剰防衛です」

ヘリオン「それに、そのせいで周りにも被害が出ています」

赤髪「反応できない周りがいけない」

ヘリオン「そんなの無責任です」

赤髪「私にはそんな責任はない」

ヘリオン「そんな」

ブチッ！！

僕の中で何かが壊れた

龍「まずいな」

ファレーン「竜司さん？」

？「我は竜司ではない、我は人格【龍次】怒りと憤怒をあらわす人格なり」

人格【龍次】は性格だけでなく、容姿にも変化が現れた  
まず、髪の色が紅に染まった、そして体格が変わった  
どう変わったかと言えば、身長が縮んだそして遅いからだから  
筋肉が半分ほど消えた

赤髪「何？」

龍次「貴様のその腐った性根を叩き直してくれよう」

赤髪「やれるものなら」

龍次「ではお構いなく」

ガンッ！！

赤髪「グハッ！！」

赤髪の少女は、腹に強烈なボディーブローを食らった

龍次「ほれほれ、次いくぞ」

バシッ！！、ゴキッ！！、ドゴッ！！

ドサッ

赤髪の少女は反撃もできずに地面に倒れ伏した

龍次「どうだ、所詮貴様の力はその程度だ、分かったか」

赤髪「まだまだ!!」

龍次「まだやるか、身の程を知れ」

そう言つて、赤髪の少女を殴ろうとする

?「待つてくださーい」

龍次「誰だ」

ハリオン「私は、ハリオン・G・ラスフォルトです」

龍次「貴様は、この者の何だ？」

ハリオン「この者じゃありません、ヒミカって言ってます」

龍次「失礼した、だがそこにいるヒミカは校内での乱闘行為、暴力行為

器物破損、などの行為を行った、そのため生徒指導室への動向し先の暴力行為の理由を聞こうとしただけだ」

ハリオン「ヒミカは、私を守るために戦ってくれたんです」

ネギ「それはどういう事ですか？」

ハリオン「それは」

.....

.....

.....

続く

## 第四話

傷

ハリオン「あれは、昨日のことでした」

ヒミカ「今日もバイトに行くの？」

ハリオン「はい、私の夢をかなえる為ですから」

ヒミカ「楽しそうね」

ハリオン「働くのは楽しいですよ」

ヒミカ「どのくらい、たまったの？」

ハリオン「今は、大体50万円ほど貯まりましたよ」

ヒミカ「ずいぶん貯まったわね」

ハリオン「はい」

翌日

ヒミカ「ハリオン！どうしたのその怪我!!」

ハリオン「あゝヒミカ、じつわですね。昨日転んじやったんです」

しかし、ハリオンの怪我はころんで出来る怪我では無かった

不良「へへへへへへへ、昨日は大収穫だったな」

不良2「そうだな、うわさ道理あの女、こんなにもっていやがった」

そういつて、不良は札束を出した  
それを見て、ハリオンは少し悲しそうな表情になった

ヒミカ「まさか、ハリオン」

ハリオン「やっぱり、ヒミカには隠し事は出来ませんね」

・  
・  
・  
・  
・

・  
・

放課後

ヒミカ「ちよつと、あんだ」

不良「あゝ？何だ？」

ヒミカ「そのお金、ハリオンから取ったんでしょ」

不良「ハリオン？・・・あゝあの女か・・・そのとおりだが」

不良2「何か、文句あるのか？」

ヒミカ「大有りよ！！今すぐそのお金をハリオンに返しなさい！！

！！」

不良「嫌なこつた」

ヒミカ「何〜！」

不良「そんなことして何になる、それにこの金は俺たちのものだ」

ヒミカ「許さない・・・許さない！！！！！！！！」

・  
・  
・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・  
・  
・

・  
・  
・

ハリオン「と言う、ことです」

龍次「なるほど、しかし、なぜそれを黙っていた、ヒミカ」  
ヒミカ「・・・自分の力で取り戻してあげたかった」

龍次「なるほど、この後の判断は【竜司】に任せるとしよう」

龍次「竜司よ」

竜司「何？」

龍次「行くが良い」

龍二「行ってこい、そして全てを終わらせろ」

竜司「分かった」

竜司「あゝ、えゝ、ヒミカさん？」

ヒミカ「・・・何？」

竜司「君は、ハリオンさんのためにやったんだよね？」

ヒミカ「当たり前でしょ」

竜司「そうか、じゃあヒミカさんは悪くない、少なくとも喧嘩について

でも、あの発言と周りに対する迷惑は悪いことだからその事は謝って本当は、喧嘩をするのもあまり褒められたことじゃないけど、不評を言われるだろうけど、僕個人としては、君みたいな娘は、嫌いじゃないよ」

ヒミカ「何を言って・・・」

ヒミカは顔を赤くしながらそう言つと、顔を隠した

続く



## 第6話

傷

キーンコーンカーンコーン

ネギ「今日の授業はこれで終わりです」

「ありがとうございました」

竜司「帰るか・・・」

ヘリオン「竜司さん！」

授業終了と同時に、ヘリオンが話しかけてくる

竜司「ヘリオン、どうかしたの？」

ヘリオン「私たちと、一緒に部活に行きませんか？」

竜司「僕は別に良いけど、ヘリオンたちの部活って何？」

ヘリオン「ふふふ」

不適に笑ったつもりなのだろうが、実際はかわいくしか聞こえない

ヘリオン「それは、行っただけのお楽しみです」

とりあえず、暇だから行ってみる事にした

・・・

・・・

ヘリオン「ここが私たちの部活です」

そこには、`フミスリル諜報部、fox部隊`と書かれた看板があった

竜司「なにここ・・・」

ファーレーン「あ、竜司さん」

ニム「何のよう？」

ニムがいつもの様ににらんでくる

竜司「ヘリオンに誘われてきたんだけど・・・」

すると

ドッカーン！！！！

と、部屋から爆音とともに黒い煙が出てくる

？「あ、いつつつつつつ・・・まったく相良の奴め」

そして、煙とともに白髪に白ひげを生やした大塚 夫の様な声を  
した

中年の筋肉質でダンディなおっさんが出てきた

ヘリオン「だ、大丈夫ですか？スネークさん」

スネーク「大丈夫だ・・・それよりも、そっちの男は誰だ？」

おっさん、もといスネークと呼ばれた男がこつちを向いた

竜司「僕は、ヘリオンの・・・友達です・・・ボソ一応」  
スネーク「そうか・・・ようこそfoxへ」

竜司「え？」

スネーク「立ち話もなんだから、早く中に入れ」

竜司「え？へ？」

竜司の運命は、そしてスネークの正体とは？

続く

## 第七話

### 第七話

僕は、スネークさんとヘリオンからfoxの活動内容を教ええもらいfoxに参加することにした。

#### 活動内容

第一条foxは学校内、学区内での問題・事件等において、学園および学区内において

すべての機関を超える権限を有する、一部例外あり「第四条を参照」

第二条foxは学校関係者を学校・校舎を支援・護衛および守護することにおいて

如何なる武力行使も容認される

第三条fox関係者は、学校関係者全てに対し公平でなければなら  
ない

第四条foxは学区外での学校関係者を擁護・守護・護衛活動は  
特定の条件下において容認・執行される

条件

・学区外、主に修学旅行、臨海学校、校外学習先での問題発

生時

は全権限を持つて生徒学校関係者を全力を持つて守護する

- ・授業時間外では一部制限がある

武器の使用の制限、

刃渡り20cm以上の刃物の使用禁止

刃渡り20cm以下の刃物の使用の制限、主に部員、  
学校関係者の生命の危機

重・小火器類の使用厳禁

爆発物の使用厳禁

格闘用武器、ヌンチャク、三節棍、六尺棒、その他の

武器の使用制限

車両・航空機・船艇の使用の制限、主に戦争・内乱・

デモ・抗争等の

大規模戦闘状況下

活動の制限

護衛対象が1人の場合、使用できる武器はスタンガン・  
スタンロッド、

催涙ガス、弱装弾の模擬弾を装填した小型ハンドガン

一丁

刃渡り10cm以下の刃物、小型車両の使用、100

0cc以上の二輪車の使用解禁

禁止事項、先制攻撃・過剰防衛・制圧行動の全面禁止、

例外は認められない

護衛対象が2人～6人の場合、使用武器は1人の場合  
の武装に加え

ハンドガンの使用数を一丁～三丁とするほかその他武器の使用解禁

中型車両の使用解禁、刃渡り20cm以下の刃物の使用解禁

禁止事項、同文

護衛対象が7人～12人の場合、上記の他ハンドガンの使用・携帯数無制限

大型車両の使用、回転翼機の使用、小型船舶の使用解禁、スモーク・スタングレネード

等の手投げ弾の使用一部解禁（手投げ焼夷弾、火炎瓶、手榴弾等が禁止）

弱装弾の模擬弾を装填したライフル銃三丁までの使用解禁

禁止事項の全面解禁

護衛対象が12人以上の場合、制限全部解禁ただし、銃器類は全て

弱装弾の模擬弾を装填する事

第五条f o xは有事の際陸・海・空自衛隊、警察庁、海上保安庁との連携が可能

要請があつた場合は協力が義務づけられる

第六条f o xは生徒会執行部と同等の権限を持つと同時に、生徒会長が総指揮権を持つ

第七条f o xは伝統的に生徒会の黙認する非容認組織とする、その為部活動費用は下りない

スネーク「以上がfoxの活動内容だ、まゝ俺たちは学校防衛法と呼んでいる」

竜司「なるほど・・・」

コンコン

？「入るわよ」

ヘリオン「あ、会長さん」

入ってきたのは、まほら学園生徒会長の桂 ヒナギクが入ってきた彼女は学園の歴史で二人目の1年生生徒会長で文武両道、才色兼備の最強生徒会長だ

ヒナギク「あら、貴方は確か戦神 竜司君ね」

竜司「はい」

ヒナギク「foxに入るの？」

竜司「ヘリオンに誘われてきました」

ヒナギク「そうなの」

スネーク「で、どうしたんだ？」

ヒナギク「ハヤテ君とナギが来ていないかと思って」

ヘリオン「来ていませんね」

？「失礼します」

ヘリオン「どうぞ」

？「失礼します」

？「失礼するのだ」

ヒナギク「あ、ハヤテ君それにナギ探してたのよ」

ハヤテ「どうしたのですか」

ナギ「どうしたのだ？まさか、未確認の飛行物体が・・・」

ハヤテ「お嬢様、それは無いでしょう」

ヒナギク「ハヤテ君・・・」

ハヤテ「？」

ヒナギク「ナギ・・・そのまさかよ」  
一同「・・・え？」

続く



## 第八話（前書き）

久しぶりの投降です、見てやってください

## 第八話

### 第八話

生徒会長からの要請を受けたfoxは急遽学園の世界中前広場に急行した。

ヒナギク「竜司君も来るのね」

竜司「まあ、一応・・・」

本当は、ヘリオンに泣きつかれたとはとても言えない

ヒナギク「？」

竜司「スネーク先生」

スネーク「何だ？」

竜司「武器は携帯しないのですか？」

スネーク「今回は戦闘行為が前提じゃない、それと・・・」

竜司「？」

スネーク「俺は、教師じゃない！！この学校の生徒だ！！！」

竜司「ええっ！！本当ですか！？」

ヒナギク「本当よ、彼ソリッド・スネーク・・・正確にはイロコイ・プリスキンは

この麻帆良学園高等部の1年生よ」

竜司「同級生！？」

スネーク「驚いたか」

竜司「え！？だってスネークさんって歳は・・・」

スネーク「15だ・・・」  
竜司「以外だ・・・」

・・・

・・・

・・・

そんなことを話している内に、僕たちは広場に着いた  
そこには、確かななぞの浮遊物体が浮かんでいた。（かなりデカイ）

スネーク「あれは、一体何なんだ？」

ヒナギク「私に聞かれても・・・」

竜司「ん？あれは・・・」

僕の視線の先には、何故か学ランを着てきれいな黒い髪を短く切り  
そろえた

端正な顔立ちの、自分と同じくらいの歳の無表情な少年が立っていた

ヘリオン「あれは・・・」

ハヤテ「人ですね・・・」

ナギ「人だな・・・」

僕は、意を決して話しかける事にした

竜司「あの〜」

？「・・・」

竜司（聞こえないのかな？）

？「・・・」

竜司「あの〜！」

大きな声で話しかけると、彼は僕に気づいて僕の方を向いた

？「・・・なに？」

竜司「ここで何をシテイルノカナ？」

？「・・・観察」

竜司「楽しい？」

僕が聞くと、彼は何も言わずにただ頷いた

竜司「ところで、君の名前は？僕の名前は戦神 竜司」

烏丸「・・・烏丸 大路」

すると、遠くから少女が走ってくる

？「いたー！！烏丸くん！！」

烏丸「あ・・・塚本さん」

塚本「烏丸君、探したよ」

烏丸「ごめん・・・塚本さん、それより僕に何か用かな？」

塚本「いや〜特に用はないんだけど・・・ここで何をやっているのかな？って思ってた」

烏丸「・・・観察」

塚本「へ〜」

竜司「何なんだ？この二人は？」

スネーク「様子はどうだ？」

竜司「あの二人は、この学校の生徒で、特に問題はありません」  
スネーク「そうか・・・」



竜司「僕は大丈夫です」

ヘリオン「こつちも無事です」

スネーク「問題ない」

ナギ&ハヤテ「大丈夫です&なのだ」

セリア「無事よ」

烏丸「大丈夫？塚本さん」

塚本「私は大丈夫（烏丸君が守ってくれた）」

スネーク「状況確認っ！！」

セリア「了解！！」

ヘリオン「索敵・安全確認完了！！」

ヒナギク「以上はないわ」

スネーク「よし、ハヤテ！！」

ハヤテ「はい！」

スネーク「竜司に銃を渡して俺と来い！！竜司もだ！！」

ハヤテから渡されたm92fミリタリーモデルを受け取ってスネークさんに

ついて行く。

ハヤテはuzi smgをスネークさんはak47sを構えて進む  
僕はその後を追う

スネーク「クリア！！」

ハヤテ「こつちもクリア、誰もいません」

竜司「こつちもだr・・・」

ガサッ！

竜司「大丈夫か！！」

スネーク「どうした！！」

竜司「252確認!!早く来てください!!」

スネーク「了解っ!!ハヤテは本部に連絡をしてくれ!!」

ハヤテ「了解!!」

竜司「大丈夫か!?しっかりしろ!!」

?「・・・うん?」

竜司「気がついたか」

?「ここは・・・?」

竜司「ここは・・・地球だ」

?「・・・地球?」

竜司「そうだ・・・名前はわかるか?」

?「初音・・・ミク・・・」

続く

## 第九話

### 第九話

スネーク「で・・・この少女は・・・どうするんだ？」  
ヒナギク「そもそも、名前は？」  
竜司「初音ミクと名乗っています・・・」

前代未聞だな・・・

誰かが言った

ハヤテ「気がつきましたよ」  
ミク「・・・ここ・・・は？」  
スネーク「地球の・・・」  
ヒナギク「麻帆良学園よ」

・・・

沈黙が続く

伝令「あー」  
スネーク「あ、どうした？」



伝令「そこにいる少女に、会いたいという人がいるのですが・・・」  
スネーク「すぐに呼べ!」  
伝令「了解しました」

・・・

・・・

?「失礼します」

竜司(妙にこもった声だな)

ヒナギク「どうぞ」

緊張が走る

ガチャツ

ミク「兄さん!!」

?「ぶわっ!!」

一同「!?!」

・・・

k a i t o「失礼しました、私の名前はk a i t o・・・初音ミクの兄です」

ヒナギク「ご兄弟ですか・・・」

スネーク「空気を読むのは苦手なんだ・・・単刀直入に聞くとぞ」  
セリア「あなた達は何者なの?」

・・・

空気よまね

k a i t o「僕たちは、惑星ヴォカロから来ましたヴォーカロイドです」

竜司「ヴォーカロイドとは？」

ミク「ヴォカロの住民のことをヴォーカロイドと言うのです」

ヒナギク「何で、地球に？」

ミク「それは・・・」

k a i t o「ヴォカロは消滅しました・・・」

一同「!!」

k a i t o「あれは、突然のことでした・・・・・・・・・・」

僕たちの住んでいたヴォカロは突然、強力な超軍事国家ヴァンターン帝国の

攻撃を受けました。

僕たちも反撃しました・・・がヴォーカロイドは平和を好み音楽を愛する

とても、穏やかで平和的な種族です。

当然武器も急ごしらえで、全く勝負になりません。

このままでは、一族は根絶やしにされてしまう、そう考えた僕たちは脱出船に乗って星を捨てることにしたのです。

ですが、奴等ヴァンターンは船を攻撃してきました。

これも、ろくな機銃一つありません、脱出船は破壊され脱出ポッドも半分以上が打ち落とされました。

そして、多くのヴォーカロイドはこの銀河系の太陽系の惑星に不時着しました

そして、今に至るわけです」

スネーク「なるほど・・・生き残りは地球に下りただけだな」  
ミク「なぜですか？」

ヒナギク「太陽系で生物が生存できるのは地球だけなの・・・」

・・・・・・・・・・・・・・・・

再び沈黙が続く

そのとき

伝令「報告します！！アンノウン接近です！！！」

続く

## 第十話

### 第十話

アンノウン接近！！

スネーク「緊急事態発生！！対空要員は所定の位置に着け！！」

兵士「了解！！」

スネーク「総員第一種戦闘配置！！」

兵士「第一種戦闘配置！！」

スネークが、号令を出し隊員がそれに従う。

みんな、動きが機敏だよほど慣れているのだろう

スネーク「竜司！！」

竜司「は、はい！！」

スネーク「ハヤテについていけ！！」

竜司「はい！！」

僕は、急いでハヤテさんの下に向かう

兵士「a g m - 6 5 マーベリックミサイル接近！！数2！！」

ミサイルの接近を伝えるアラームが鳴る

スネーク「m i h t lで迎撃しろ!!」  
兵士「了解!!」

兵士2「ミサイル来るぞ!!」  
兵士3「撃て!!」

パシュン!

ドンッ!!

兵士「迎撃成功!」  
スネーク「よし!次は敵機を撃ち落とすぞ!!」  
兵士「了解!!」  
スネーク「ハンドアロー用意!!」

兵士2が見慣れない濃い緑色の筒を取り出して肩に担いだ

兵士「敵 f - 4 ファントム接近!!」  
スネーク「よく狙え」  
兵士2「はい!!」  
兵士「着たぞ!!」  
スネーク「テエ!!」

パシューン!!

ハンドアローと呼ばれた筒から、ミサイルの様な物が飛び出した

兵士「着弾、3 / 2 / 1、今!!」

ミサイルは、敵の戦闘機に当たった、ミサイルが当たった戦闘機はそのまま吹き飛んだ

スネーク「状況終了、警戒態勢に移行」

兵士「状況終了、警戒・・・」

スネークさんの隣の兵士が復唱する

スネーク「どうだ、初の戦闘は」

竜司「僕は、何もしてませんよ」

スネーク「いや、十分しているさ・・・」

竜司「？」

スネークさんの様子がおかしい、それと体が妙に温かい、何か柔らかい物を抱きしめている様な感じだ・・・

竜司（ん？・・・柔らかい・・・の・・・！！）

そこで気づく、僕は何かを抱きしめている・・・否、『誰か』を

ヘリオン「ああああああ、あの〜りゅ、りゅりゅりゅ竜司さん」

ヘリオンの声が聞こえる、胸の辺りから・・・

竜司「ご、ごごごごごめんなさい！！！！」

ヘリオン「い、いいいいいえ、ただだ、大丈夫ですから！！」

僕は、気づいたらヘリオンを抱きしめていた・・・ずっと

・ ・ ・ ・ ・

・ ・ ・

その後は、スネークさんに『お前たち、結婚したらどうだ?』と  
からかわれ、その言葉にヘリオンは何故か顔が真っ赤になり  
セリアが『不潔』とつぶやき、ファーレーンがうつむき何やらぶつ  
ぶつ言い始め  
ニムに思いつき蹴られた。

?「何があつたんですか!?!」

気づかないうちに、見知らぬ人たちがいる

スネーク「テストロッサ大佐!」

竜司「誰?」

スネーク「テレサ・テストロッサ大佐だ、この部隊の責任者だ」

テレサ「よろしく願います・・・え」と・・・お名前は?」

竜司「失礼しました、僕の名前は戦神竜司です」

テレサ「よろしく願います竜司さん」

宗介「相良宗介だよろしく頼む」

続く

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2162m/>

---

傷

2011年10月7日00時35分発行